20 周年に寄せて

立教のボランティア

押見輝男

立教大学ボランティアセンターの開設10周年を心からお祝いします。この歳月の成果はセンター活動に携わってこられた学生、教職員、コーディネーター、関係者のみなさんのご尽力のたまものであり、深く敬意を表します。発足当初は、今日のような盛り上がりもなく、センターの設置場所の確保すらままならず、小さくて静かな存在として誕生しましたが、今や自立した力強い存在へと成長しました。

ボランティアセンターの歴史は10年といっても、立教大学にはボランティア関連活動の長い歴史と幅広い実績があります。ポール・ラッシュ博士の奉仕活動に代表されるチャペルの活動はよく知られていましたし、学生部が助育の精神に基づいて正課外教育としてコーディネートした学内外の学生活動、いくつかの学部の福祉関連活動、校友会とくにレディスクラブのボランティア活動など、センターができる前から多面的に展開されていました。ボランティアセンターは、それらの伝統、実績を土台としながら、既存の諸活動を整理統合する試みとしてではなく、改めて立教大学が教育責任としてボランティア活動に主体的にかかわることを学内外に示し、その目的ための運動体として設立されたのでした。

そもそも立教のアイデンティティ、立教らしさの具現化の一つといえるものが、ボランティア活動です。ボランティアは一般的には、困窮者に対する自己報酬を伴わない奉仕活動と考えられています。しかし、その本質は強者、持てる者が、弱者、持たざる者に自己犠牲的な援助を行うことではありません。上下、強弱の関係を捨て、手助けを求める者と手助けできる者とがお互いを尊重しながら協働してことにあたる。その相互作用を通して、それぞれが人間的尊厳と共生、共存の重要性を自覚して人間的成熟を求めようとするヒューマン・ムーブメントです。まさに立教大学が掲げる、キリスト教に基づく人格の陶冶という目標の実践といえます。

十数年前にボランティアセンターの設置を促した背景条件は、国の大学規制の緩和に伴って各大学で起こった大学個性の鮮明化の動きでした。立教の人間教育の歴史は正課教育とともに正課外教育を重視し、学生たちが教室に留まらず、様々な形で「いで立つ」ことを奨励してきました。いで立つとは、他者の方に主体的に向かうことです。ボランティア活動を大学が教育責任をもって支援することは、立教の人間教育の強化につながると改めて自覚されました。さらにセンターがあれば、校友、地域、外部団体と協力連携の道が開け、立教の教育空間の拡大が期待できました。立教のボランティアセンターは開かれた運動体を意図していました。

ボランティアの大事な精神は、自己の価値観、心理を相手に押しつけることを忌避し、相互に受容しあうことで、他者と自己の成長、成熟を願うという姿勢です。それはまた、立教らしさの現われでもあり、立教のバックボーンであるキリスト教聖公会の本質(「あれも、これも」の受容と昇華)です。立教のボランティアセンターが、既存の諸活動の統合を単に求めたものではなかったこと、学生だけでなく、教職員、校友を含めた運動体をめざしたこと、自己犠牲的援助ではなく、互恵・互譲の精神に基づくコラボレーションとしてのボランティア活動を奨励しようとしたことは、立教らしさとして脈々と流れる立教の心の伝統に基づいていました。

立教大学ボランティアセンターの益々の発展を大いに期待する次第です。

(立教大学元総長)

※10周年記念号より再掲

立教大学のボランティアー

森秀樹

「ボランティアセンター」開設20周年、誠におめでとうございます。開設当時、立教に「ボランティアセンター」のようなものを設置する「必要」を強く願っていた一人として、20年という歳月はずいぶん長くも感じられますが、その活動や組織や意義が、多くの立教構成員に認められ、また外部に向けても、年々その存在が広く認知されてきたことを、何よりうれしく思います。

そもそも、「ボランティアセンター」のことが大学執行部で話題になったのは、2005年～2006年ころでしたが、そのころは、ほぼ15年ほど前から、文科省の「大学設置基準の大綱化」の波を受け、本学にとっても最も重大な課題となっていた「学部再編」の問題をめぐり、激しい議論と、さまざまな試行が繰り返されており、「ボランティア」のような「ヒューマン」な課題に議論を費やす余裕が、大学全体として持てない時期でもありました。

しかし、「学部再編案」を練ってゆく段階でも、私たちは、絶えず、「学の配分」も重要なことだが、もっと大事なことは、「本学の教員・学生」が人間・集団としてのあるべき「生き方」を探り、豊かな人間と集団をめざす「方向性」を探ってゆくことではないか、という想いを強く持ち続けていました。というのも、立教には、古くから、「キリスト教」に基づいた実践的な福祉活動や、困難な人々を救済しようとする「ボランティア活動」の長い歴史があり、その精神は、これからも、しっかり引き継がれてゆかなければならないという「信念」が、多くの教員にあったからです。

押見元総長の「立教のボランティア」の文章にも、その「精神の継続」について、詳しく述べられていますが、私たちは、「ボランティア」について、大学の教育責任として、その活動に主体的にかかわり、なによりも「運動体」として「ボランティアセンター」を設置すべきであること、「ボランティアー」とは、強いもの、豊かなものが、弱いもの、貧しいものに援助の手を差し伸べることではなく、両者がそれぞれの立場で、相手のことをおもんばかり、「共生・共存」を計ってゆく「協働」をめざすこと、すなわち「ヒューマン・ムーブメント」として捉えるべきことが、述べられています。そして、学生達も教員も、単に教室に止まるだけでなく、さまざまな形で「現場に出で立つ」こと、「何かを見て、考える」だけでなく、積極的に「動くこと」、それこそ、「ヒューマン・ムーブメント」としてのボランティアーの意味なのだと、私も考えています。

2003年に、4 号館付近の狭い部屋で、細々と始まった「ボランティアセンター」が、この20年間で、上記の精神を体現しながら、具体的な活動と組織化を力強く進めて来られたことを、定年後の私は、これまで詳しくは知らなかったのですが、いま、ボランティアセンターのホームページを見て、私たちが考えた「ヒューマン・ムーブメント」という精神が、色々な形で実現されとようとしていることを知り、本当にうれしく思うと同時に、大学構成員が、これからも、ますますその活動を自覚的に進めていってほしいと、心から切望しています。

（立教大学 名誉教授　元総長室長）

20周年に寄せて

松井明子

ボランティアセンター20周年誠におめでとうございます。

私は、2003年にそれまでチャペルで長い間活動していた歴史あるボランティアセンターが学生部に移管された時に初代課長を拝命いたしました。学生部での開設にあたり2002年に当時の押見総長と早稲田大学WAVOCの施設を見学させていただきました。押見総長は立教大学らしいボランティアセンターの在り方を考えるようにと指示を出されましたが、４号館横の部屋と職員も配置されたものの、学生部副部長と生活課長兼務の多忙もあり、立教大学らしいボランティアセンターの構想をどのように描けばよいのか発足当初は一人で悩んでいたことを思い出します。

しかし、私が悩んでいる間にボランティアセンターに集う学生たちは自分たちで具体的な行動を起こし始め、2004年に起きた新潟県中越地震へのボランティア活動に出かけると言い荷物も準備し始めました。受け入れ先もよくわからないまま行動を起こそうとした学生達に学内ではリスクが大きいと反対意見もありましたが、学生達の意思と行動は明確でした。本年も元旦に大きな能登半島地震が起きましたがボランティア活動が被災された方々の前を向く力になっている報道などに接すると、当時の学生たちの姿こそが立教大学らしいボランティアセンターのスタートであったのではないかと思えます。

私は学生部に在職していた時に現在はボランティアセンターの所管となっている山形県高畠町の「農業体験」にかかわり、学生と一緒に何年も高畠に通いました。ご承知のように「農業体験」は学生部セミナー「環境と生命」のフィールドワークとして当時の学生部職員達が立ち上げたプログラムでした。それはいかにも立教らしいプログラムだと他大学職員に言われることもあり、ボランティアセンターでも職員主導で立ち上げるプログラムに学生を参加させるという形式にこだわろうとしていました。しかし、新潟にリュックと寝袋を背負い出かけて行った数人の学生達の姿をみて「自主的な学生の力を信じる」という感覚にハッとさせられ「学生の力を信じる」と頭では理解していても、教育機関で長く働くうちに主役が学生であることを忘れかけていた自分に気づかされました。

私の３年間の在職期間は立教らしさの模索で終わりましたが、チャペルでの理念を基礎にもち、いくつか所管部局の変遷を経て、多くの教職員の方々のご尽力によって大きく育ち、今や立教学院として大きな活動体となり、真に立教らしいボランティアセンターとして確立されたことに心からの感謝を捧げたいと思います。

これからも活動には多少のリスクはあるかもしれませんが、学生の力を信じる立教らしいボランティアセンターでありますように、益々のご発展をお祈り申し上げます。

（元立教大学職員、2003～2005年度ボランティアセンター課長）